

Sick contact

本康医院 本康宗信・静岡薬剤耐性菌制御チーム

静岡県立静岡がんセンター 感染症内科 倉井華子

発熱の患者を感染症と診断したときに、感染臓器、起因微生物の推定を行います。その際、病歴を確認するのによく使われるチェックリストがあります(表 1)。

表 1 感染症の病歴をとる際の注意点(STSTAE)

Sick contact	発熱、同様の症状の人との接触
Tuberculosis contact	結核または疑われる人との接触
Sexual contact	性的な接触の有無
Travel history	渡航歴、流行地域への移動歴
Animal contact and intake	動物との接触、摂食歴
Environmental exposure	環境要因(海水、河川、温泉等)

外来では sick contact が最も使われる項目だと思います。2025 年 10 月からはインフルエンザの流行が始まり、静岡県でも警報レベルとなっていました。流行時期に発熱で受診される方には、周囲で同症状の方がいたかどうか確認することが多いと思います。COVID-19 の流行が落ち着いている時期では、突然の発熱、咳嗽、倦怠感はインフルエンザを示唆し、家族内や通園、通学先の状況が分かっていれば、事前確率は高くなり、抗原検査をする必要性が少なくなります。

小児では sick contact の機会が大人よりも圧倒的に多いです。小児は、園や学校で集団生活をしていることが多く、幼児では飛沫、接触感染予防策をとるのが難しいので、ウイルス感染症にかかりやすくなっています。百日咳のように細菌感染症でも流行しやすいものもあります。一方、新生児では、外出することが少なく、家人から感染する以外には、ウイルス感染症の曝露が少ないです、そのため、新生児の発熱では、細菌感染症の可能性が相対的に高くなります¹⁾。

ペットや動物との接触があると、人獣共通感染症を考えますが、病気の動物との接触は注意すべき sick contact の一つと考えられます(表 2)。重症熱性血小板減少症候群(Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome : SFTS)のように、致死的になることがあるので、具合の悪い動物との接触についても留意する必要があります。

表 2 病気の動物から感染する可能性のある疾患²⁾

疾患	動物の症状	感染源の動物	感染経路	ヒトの主な症状
皮膚糸状菌症	脱毛、発赤	イヌ、ネコ、ウサギなど	接触	皮膚炎
疥癬	搔痒、発赤	イヌ、ネコ	接触	皮膚炎
オウム病	食欲低下、死亡	オウム、インコ類	吸入・経口	肺炎
ジアルジア	下痢	イヌ、ネコ	経口	下痢
SFTS	嘔吐下痢、早期死亡	ネコ、イヌ	接触	発熱、血小板減少

診療所では、近隣の方の通院が多いので、家族の情報、地域の保育園、幼稚園、こども園、学校での流行が把握しやすいところです。学校医、園医には流行時に、感

染対策や閉鎖について相談があるので、さらに情報が多いと思います。学生の場合には、所属部活動、登校方法やバス、電車路線も参考になります。連日、外来をされている先生方では、流行している疾患をリアルタイムに感じておられると思います。COVID-19 の流行時に、密になるところでの感染のしやすさが注意点とされ、飲食や移動先の問診が重要となりました。これは飛沫感染一般に言えることであり、一緒に行動した友人や同僚の状況、同居家族でなくとも飲食を共にした方の、健康状態を確認することが一般的になってきました。最近では SNS でイベント後に、感染症を発症した情報を発信する方もあり、参考になります。

接触した時期の問診について、疾患の潜伏期も考慮する必要があります(表 3)。接触の程度にもよりますが、潜伏期の長い感染症では、感染時期がわかりにくいことがあります。

基本再生産数は、感染症にかかった方が、免疫を持たない集団に入った場合、周囲に感染させることができる人数で、流行の初期には、参考になります。ただ集団の性質や社会的環境に影響を受けますので、地域差を考慮する必要があります。実行再生産数は、すでに感染が広がっている状況で、一人の感染者が周囲に感染させる平均人数で、感染状況や対策によって変化してきます。現在の感染状況については、医師会や行政から発表される全数、定点報告などのサーベイランス情報が参考になります。

表 3 静岡県で 2025 年に流行した感染症

感染症	潜伏期	基本再生産数
インフルエンザ	1~4日	1~3
COVID-19	2~7日	2.5
RSV	4~7日	3
百日咳	5~21日	16~21
マイコプラズマ	1~4週	1.5~2
伝染性紅斑	1~2週	1.5~2.5
A群β溶連菌	2~5日	
ノロウイルス	0.5~2日	2~3
ロタウイルス	1~3日	

冬季には感染症が多くなり、日々の外来も忙しくなります。抗原検査や血液検査も参考になりますが、問診特に sick contact の把握により、診断までの時間も早くなり、検査をする手間も減る可能性があります。発熱=抗菌薬といった系図はほとんど見られなくなましたが、インフルエンザや COVID-19 が陰性であっても、病歴の再確認を怠らないようにしたいところです。

- 1) Greenhow TL, et al.: Management and Outcomes of Previously Healthy, Full-Term, Febrile Infants Ages 7 to 90 Days. Pediatrics. 2016 Dec;138(6): e20160270. PMID:27940667
- 2) 兼島 孝:獣医師の間で問題となっているペットからうつる感染症の実際 チャイルドヘルス Vol.20 No.11 811-815 2017 診断と治療社